

緑の風 FAX版



NO. 95 2019年3月11日 JR東労組

JR 東労組ホームページ

あの日から8年！ いまだ道半ばの“復興”！！

東日本大震災発生から、今日で8年。あれから目まぐるしい復興を遂げる一方で、被災地の現実には時間が止まっている所が多々あります。“復興”を発信するという東京オリンピック開催まで、明日で500日。しかしその一方で、取り残されたかのように、双葉町の面積96%は、いまだ帰還困難区域に指定されています。私たちは被災地の現実や、人々の想いにはせ、3.11のことを風化させないように、仲間と共に安全について議論をしましょう！

住民の思い乗せ「もう一度」

3月11日付 世界日報 三陸鉄道出向の運転士

東日本大震災で被災し運休が続いていたJR山田線の宮古―釜石間が第三セクターの三陸鉄道（本社岩手県宮古市）に移管され、「リアス線」として8年ぶりに復活する。震災前に山田線の運転士を務めていた板沢浩さん（55）は「住民の思いがこもった山田線をもう一度運転したい」と、自ら志願して三陸鉄道に出向。今月下旬の再開に向け、訓練運転に臨んでいる。

新しい住宅が建ち始めた被災地をトリコロールカラーの列車が走ると、復興住宅のベランダや陽台のそばから住民が手を振って迎えた。

訓練運転の車両で横線レバーを握る板沢さんは「運転中は手を握れないから、心の中で手を握り返した。励みになる」と笑う。

盛岡市の高校を卒業後、旧国鉄に入社した。岩手県の沿岸部を走る山田線は、20代の頃から運転してきた。利用するのはいつも向



訓練運転の前に、車両の横に立つ運転士の板沢浩さん。JRから三陸鉄道に出向した2日、岩手県宮古市の宮古駅

8年ぶり復活、山田線

被災地を走る列車が、復興住宅のベランダや陽台のそばから住民が手を振って迎えた。

訓練運転の車両で横線レバーを握る板沢さんは「運転中は手を握れないから、心の中で手を握り返した。励みになる」と笑う。

盛岡市の高校を卒業後、旧国鉄に入社した。岩手県の沿岸部を走る山田線は、20代の頃から運転してきた。利用するのはいつも向

じ離れただけだったので、誰がどこで降りるのか見えなかった。誰かを助けてあげたいという思いがこもった。震災前は山田線の運転士を務めていた板沢浩さん（55）は「住民の思いがこもった山田線をもう一度運転したい」と、自ら志願して三陸鉄道に出向。今月下旬の再開に向け、訓練運転に臨んでいる。

三陸鉄道 北里アス線（久慈―宮古）と南リアス線（釜石―盛）を運行する第三セクター。宮古―釜石間を走る山田線の運管をJR東日本から移管される。山田線部分が開通すると、北の久慈駅を結ぶ。

8年前の3月11日、津波で山田線の駅舎は破壊され、鉄橋は流失した。その後、JR東日本がJR-T（ハ）

と南の盛岡まで一本につながり、路線の名称も「リアス線」に変更。163kmで三セクとして国内最長となる。23日には山田線部分で記念列車を運行。24日から営業運転を開始する。

ス高規格輸送システムへの導入を地元で協議すると、沿線各地で鉄道復活を求める署名活動が始まった。

当時釜石線で運転していた板沢さんも、釜石市内のレバーで署名を集める住民の姿を目にした。運営を引継ぐ三陸鉄道を支援しようとJRが出向する社員を募ると、「俺が行きます」と手を挙げた。

2月から始まった訓練運転では、三陸鉄道の運転士と一緒に乗車することもあった。ここはカーブで走りながら「ここから汽笛を鳴らして」と、宮古―釜石間を初めて運転する若い運転士にアドバイスする。「新しい駅もできた。たくさんの人に集ってほしい」と運行再開を心待ちにしている。

東日本大震災8年

止まった時間 福島双葉町

今もなお福島第一原発事故の影響で全町避難が続く。全面積の96%が、住民で指定された双葉町。静まり返った商店街に風が吹き抜けて来ると、半壊した商店のガラスがカタカタ音を立てた。震災当日に児童たちが遊んだままの遊具が残る双葉町。ランドセルが置かれた教室には、今にも子どもたちが忘れ物を取り戻して来そうだった。

「また会えるといいなあ」

原簿周辺の地区では、町に隣接する大森町にまたれた双葉中の三年生の教室の黒板には、生徒たちが書いた言葉が残る。「復興」を願う声も、3月11日付東京新聞で明日で500日だ。（福島の復興）

3月11日付 東京新聞

震災の教訓を忘れず、
安全な鉄道を
共に創り上げよう！